タイラー『原始文化』のいくつかの背景

奥山倫明

Okuyama Michiaki

「宗教学名著選」は、南山宗教文化研究所の企画協力により、2013年より国書刊行会から刊行されてきた。このシリーズにおいて、ミルチャ・エリアーデ『アルカイック宗教論集―ルーマニア・オーストラリア・南アメリカ―』（奥山倫明監修、2013年）、フリードリヒ・マックス・ミュラー『比較宗教学の誕生―宗教・神話・仏教―』（松村一男・下田正弘監修、2014年）、フリードリヒ・ハイラー『祈り』（深澤英隆監修、2018年）に続いて、このたびエドワード・バーネット・タイラー『原始文化』〈上・下〉（松村一男監修、2019年）が出版される運びとなった。1871年に初版が刊行されたこの書籍の1920年刊行の第六版からの新訳の出版にあわせて、19世紀の英国における同書初版刊行の頃までの宗教とそれを取り巻く諸状況について、簡単に振り返っておきたい。

タイラー『原始文化』の1873年版（第二版）については、比屋根安定（1892–1970）による抄訳が誠信書房より1962年に刊行されている。その訳書の訳出方針について比屋根は、「わたしは、本書を日本訳すべき必要を切に感ずると共に、両途の難関を切り開くために、いわゆる逐語訳を敢てせず、根本をなす大意を余さず捉え、必要の個所は漏れないよう期して、この書巻にまとめた」（同書「解題」v頁）とし、原著の二巻1,000頁弱を日本語版270頁に圧縮している。すなわち比屋根訳は、かなり切り詰めた大意訳というべきものとなっている。したがって、今般の上下巻での翻訳は、実質的に本邦初訳と位置づけることもできよう。

なお『原始文化』〈下巻〉には松村一男氏と、訳者の堀雅彦氏、長谷千代子氏、奥山史亮氏による解題・解説が付され、同書の学説史的、思想史的な意義が詳細に論じられることになっている。したがって本稿は、学説史的なタイラー論となることを目指すものではなく、ごく簡単な導入のための覚書として執筆することとする。

個人史の概要

まずは、*Oxford Dictionary of National Biography* のオンライン版を主に参照しながら、他の資料で補いつつ、タイラーの生涯を概観してみる。[1]

エドワード・B. タイラー (Edward Burnett Tylor, 1832–1917) はイングランドのキャンバーウェル出身で、父 Joseph は真鍮鋳造所の裕福な経営者だった。両親はプロテスタ

1. 2006年9月18日 版、https://doi.org/10.1093/ref:odnb/36602

ントのフレンド派（クエーカー）で、[2] トットナムの同派の学校で学んだのち、16 歳で父の鋳造所で働き始めた。1855 年に結核の兆候が出て、転地療養のために米国、次いでキューバに赴いた。翌年、ハバナでクエーカーのイギリス人銀行家・慈善事業家で、異文化への関心を深めていた Henry Christy (1810–1865) に会い、二人でメキシコに旅行に出かけ、その間に、考古学・民族学への関心を深めた。その後、快復期をフランスのカンヌで過ごしながら、最初の著書 *Anahuac, or, Mexico and the Mexicans, Ancient and Modern* を執筆した。1858 年にイングランドに戻り、同年、同じクエーカーのアナと結婚、1861 年に *Anahuac* を刊行した。その後、英国オックスフォードを拠点として、民族学、言語学、考古学の研究を進めた。

1860 年代初頭にはドイツの民族学者や文化史家の研究を学ぶとともに、[3] ベルリン聾唖協会に数ヵ月滞在し手話について考察しながら人間の言語と文化の発生についての研究を進めた。1862 年から民族学協会 Ethnological Society に参加し始めるが、その間にフレンド派の信仰からは離れていく。[4] 1865 年には *Researches into the Early History of Mankind and the Development of Civilization* を出版、その後、アニミズム論、文化の残存説などについての考察を深め、1871 年の 2 巻本『原始文化』の刊行にいたる。同年、王立協会フェローに選出される。1875 年、オックスフォード大学より Doctor of Civil Law の学位授与、1883 年同大学博物館長、翌年同大学の人類学の准教授 (Reader)、95 年に教授、初代人類学講座チェアとなる。[5] 1909 年退職し名誉教授、1912 年にナイトの爵位を受ける。1917 年にイングランド南西部サマセット州ウェリントンで歿した。

2. フレンド派はイングランド中部出身の George Fox (1624–1691) が 1647 年の神秘体験をもとに内面的・霊的信仰を重視して伝道を開始することから始まった教派であり、神の言葉や信仰に打ち震えるという経験から Quaker（震える人）と呼ばれる。内的信仰で見いだされる Inner Light（内なる光）を説く。北米ペンシルヴェニア植民地の創設者 William Pen (1644–1718) も、熱心なクエーカーとして知られる。

3. 民族学者 Adolf Bastian (1826–1905), 人類学者 Theodor Waitz (1821–1864), 哲学者・民族心理学者 Moritz Lazarus (1824–1903), 言語学者・民族心理学者 Hermann Steinthal (1823–1899) など。Marjorie Wheeler-Barclay, *The Science of Religion in Britain, 1860–1915* (University of Virginia Press, 2010), p. 77 を参照。

4. 民族学協会は、1837 年に設立された Aborigines' Protection Society から派生した団体で、人道主義よりは学術研究に特化した組織として 1843 年に設立。なお Aborigines' Protection Society にはヘンリー・クリスティが参加していた。また民族学協会を創設した Thomas Hodgkin (1798–1866) はクエーカーの医者だった。Timothy Larsen, *The Slain God: Anthropologists & the Christian Faith* (Oxford University Press, 2014), p. 16 を参照。ただし 1864 年にタイラーはフレンド派を正式に退会した。Ibid., p. 20 を参照。なお民族学協会を 1863 年に退会した James Hunt により Anthropological Society of London が設立され、タイラーはこちらにも参加していた。Sebastian Lecourt, *Cultivating Belief: Victorian Anthropology, Liberal Aesthetics, & the Secular Imagination* (Oxford University Press, 2018), pp. 59–60 を参照。民族学協会と人類学協会は 1871 年に合併して、Royal Anthropological Institute に改編され、タイラーはこの団体の会長を 1879–80 年、1891–92 年の二度務めた。Wheeler-Barclay, p. 80 を参照。

5. タイラーのオックスフォード大学への着任について、ウィーラー・バークレイは、マックス・ミュラーの働きかけを指摘している。Ibid., p. 81, p. 267 の note 33 を参照。ただしのちに人類学の若い世代からは、マックス・ミュラーの比較言語学的な宗教研究・神話研究は批判されるようになり、またマックス・ミュラーも逆に人類学的方法への批判を展開したという。Ibid., pp. 97–98 を参照。

時代背景

英国にとって、19 世紀はナポレオン戦争の最中に幕を開けるが、これは 1815 年のワーテルローの戦いでの勝利に終わった。[6] 国内では産業化が進展し、綿工業、製鉄業などが興隆する一方、不況を背景に労働問題も発生し、1810 年代には機械打ちこわしのラッダイト運動が起こった。また国内では交通網が徐々に整備されていった（1825 年、イングランド北部のストックトン―ダーリントン間で、スティーヴンソンのロコモーション号により最初の鉄道が開業）。ブリテン島の人口は、1801 年から 1901 年までに、1,068 万人から 3,709 万人に拡大した。その間に 18 世紀末のアイルランド独立運動は挫折し、1801 年に「グレートブリテンおよびアイルランド連合王国」が成立していた。アイルランドでは人口の 8 割を占めるカトリックの政治的権利が制限されていたが、1829 年にカトリック解放法 (Roman Catholic Relief Act) が成立し、抑圧的政策が緩和された。

1830 年代から 40 年代にかけて、工業化と都市化のなかで、新興の中流階級が勃興する一方で、労働者階級も形成されていく。17 世紀末以来の二大政党、ホイッグ党、トーリー党は、自由党、保守党へと改編を遂げる。人口の 4 分の 1 ほどを占める中流階級にとっては、選挙制度改革（1832 年第一次選挙法改正）などを通じて、議会制民主政が進展していく。他方、人口の 4 分の 3 ほど労働者階級にとっては、工場、鉱山などの労働環境の改善のための法的規制が進められ、また都市の衛生環境の改善のための施策なども行なわれていった。その間、1833 年には、イギリス帝国全域で奴隷制度が廃止される（すでに 1807 年に奴隷貿易は廃止されていた）。また 1837 年に、ヴィクトリア女王（1819–1901）が即位し、経済的繁栄を謳歌するヴィクトリア時代を迎えていく。ただし、1845 年から 49 年にかけてアイルランドで起こったジャガイモ飢饉は、100 万人ほどの死亡者を出し、さらに数十万人の移住者を生んだ（人口は 1841 年の 817 万人から 51 年の 655 万人に減少）。

19 世紀後半は、1851 年の第 1 回ロンドン万国博覧会で幕を開けた。この最初の国際的な博覧会は 40 ヵ国ほどが参加し、600 万人の入場者を集め、大きな成功を収めた。19 世紀中葉には中流階級の教育意欲が増進し、私立中等学校であるパブリック・スクールへの進学熱が高まった。在来の名門校 9 校に加えて、19 世紀中に新たに 87 校が開校した。ところで、中世以来の大学、オックスフォードとケンブリッジは非国教徒を受け入れていなかった。そこで自由主義者たちは、1828 年に University College を開校、国教会派はこれに対して 1831 年に King's College を開校していた。これらのカレッジが合併して 1836 年に University of London となる。その後、1854 年のオックスフォード大学法、56 年のケンブリッジ大学法により、それぞれの大学の非国教徒の大学教育に関する差別が撤廃され、1871 年の大学審査法により非国教徒が両大学の教職員になる道も開かれた。初等教育については、1870 年に初等教育法が成立し、公立学校での義務教育が実施されるようになった。また、1867 年の第二次選挙法改正により、地方税

6. 19 世紀イギリス史の概要については、川北稔編『イギリス史』（新版世界各国史 11、山川出版社、1998 年）所収の青木康「伝統と革新の相克」、秋田茂「パクス･ブリタニカの盛衰」と、谷川稔･北原敦･鈴木健夫･村岡健次『近代ヨーロッパの情熱と苦悩』（世界の歴史 22 中央公論新社、中公文庫、2009 年）所収の村岡健次「ヴィクトリア時代イギリスの光と影」等を参照し、まとめた。

の納入を条件とする戸主選挙権が認められ、大衆民主主義が拡大していくことになる。

なお英国のユダヤ教徒は、他のヨーロッパのユダヤ教徒よりも大きな自由を享受していた。[7] 19世紀初頭までに、ロンドンのほかいくつかの都市（港湾都市や商業都市）にユダヤ教徒のコミュニティが形成されていた。1800年頃のイングランドのユダヤ教徒人口は約3万人であり、その頃までにアシュケナジがセファルディよりも優勢になっていたという。[8] カトリックの解放に対してユダヤ人差別の解消はなかなか進まなかったが、1826年にはロンドンで市民権を獲得、1858年にユダヤ人無資格撤去法（Jewish Disabilities Removal Act）が成立した。[9] その後、1881年以降のロシアのポグロム（ユダヤ人大虐殺）を逃れ、多数のユダヤ人（1905年までに約10万人）がロンドンに移住することになる。[10]

国外植民地も19世紀を通じて拡大していく。世紀初頭までにすでにジャマイカ、英領ギアナ等、西インド諸島と中米に植民地を有していたが、ナポレオン戦争時に、南アフリカのケープ植民地、セイロン島も領有した（ジャワ島も一時占領した）。

なお、1840年には清朝とのあいだでアヘン戦争が起こり、勝利した英国が42年に香港割譲等を含む南京条約を結ぶと、その後、フランス、アメリカも清とのあいだで不平等条約を結んでいくことになる。

1857年から59年にかけて、インドでは東インド会社のインド人傭兵（シパーヒー）を中心とする大反乱が勃発、その後インドはイギリス直轄領、インド帝国となる。前後して、1850年のオーストラリア植民地法によりヴィクトリア植民地、1867年には自治領のカナダ連邦が成立した。ヴィクトリア時代には、ニュージーランド、アフリカ各地、東南アジア等で支配領域を拡大していく。

世界規模でみると、1869年にはアメリカ大陸横断鉄道が開通、またスエズ運河も完成し、国際的な貿易、流通を促進することとなった。その一方、英国の農業、工業ともに国際競争力は低下し、不況期に突入していく。ただし、対インド投資等の利子・配当収入により貿易赤字は補填できるようになっていく。これにより英国が採用した金本位制を背景としたポンド体制が、世界経済の中核を担うことになった。

以上が、おおよそ1870年頃までの英国を取り巻く状況だった。すでに国教会と、カトリック、ユダヤ教をめぐる状況についてもいくらかの事項が上がっている。また国内の近代化の状況に加えて、アイルランドとの関係、植民地の問題などについても、少々触れることになった。以下では、さらに宗教界の動向に焦点を当ててみよう。

宗教界の動向

19世紀以前に英国では、イングランド国教会（1534年、イングランド王ヘンリー8世の首長令により創設）、改革派プロテスタントのなかでカルヴァン主義の強化を目指す、より積極的な改革派であるピューリタン（国教会からの分離を目指し、ニューイ

7. ジョナサン・G. キャンベル「イギリスのユダヤ教徒」宮崎章訳、シェリダン・ギリー／ウィリアム・J. シールズ編『イギリス宗教史—前ローマ時代から現代まで』指昭博・並河葉子監訳、法政大学出版局、2014年、519頁。

8. ジョナサン・G. キャンベル「イギリスのユダヤ教徒」524–526頁を参照。

9. 浜林正夫『イギリス宗教史』大月書店、1987年、212–213頁を参照。

10. ジョナサン・G. キャンベル「イギリスのユダヤ教徒」528頁を参照。

ングランドに移住したピルグリム・ファーザーズもその一派)、ピューリタンの分離派のなかからジョン・スミス (John Smyth, 1570頃 –1612) を創始者として始まり、信仰告白と浸礼を導入したバプティスト、国教会聖職者ジョン・ウェスリー (John Wesley, 1703–1891) が倫理的な生活のなかでの信仰実践を、従来の教区を越えて熱心に伝道することから始まったメソディストなどの教団・教派が生まれていた(メソディストはさらにウェスリーの晩年以降、分裂していく傾向があった)。

また18世紀後半以降、国教会内部にも「福音主義」と総称される運動が生まれてきた。「福音主義」自体は多義的な用語で、とりわけ今日では20世紀後半以降の米国プロテスタント内の運動(聖書無謬主義に立ち回心体験を重視する福音伝道に熱心な諸教派)を指すことで知られるが、ここでは教会から出て自宅などでの聖書と祈禱を中心とする集会を拠点とする信仰覚醒の運動、さらに積極的な福音伝道を通じて同時代への関与を目指す運動を広く指している。[11] 上述のバプティストやメソディストの伝道活動に加えて、アメリカ合衆国から大衆集会の説教家を招き、信仰復興(リヴァイヴァル)の集会も開催された(会衆派の伝道者ドワイト・L. ムーディー [Dwight L. Moody, 1837–1899] の大規模集会など)。また英国海外植民地の拡大に伴い、先の意味における福音主義に基づく海外伝道運動が推進されていくことになった。

福音主義とともに拡大した民衆の宗教関与は、個々人の情動的な宗教体験の希求を一つの背景としていた。そうした体験を生みだすものとして、讃美歌などの教会音楽がある。デイヴィッド・ヘンプトンによると英国では18世紀のメソディストから19世紀のプロテスタント全体に、讃美歌が普及したとされ、その影響は1850年代、60年代にピークに達し、イングランドだけで400種の讃美歌集が出版されたという。ヘンプトンは次のように続けている。

> 讃美歌を歌うときの真剣さや自己陶酔、感傷的な側面、また歌詞に表われる力強い軍人のイメージと、幸せな家族のイメージは、説教壇から語られる抽象的な神学の言葉などはとても理解できない人びとに満足感を与え、彼らが共有できる宗教言語としての役割を果たした。……讃美歌を歌うことで豊かな感情を味わう機会は、教会での礼拝にとどまらず、家庭や仕事場、そしてときにはパブにまで広がった。[12]

イングランド国教会を取り巻く状況は、19世紀を通じて変化していった。フランス革命直後は、保守派、富裕層からは革命の防波堤として国教会が捉えられた。[13] その後、1829年のカトリック解放法に先

11. *Oxford English Dictionary* には 'evangelical' の語義について、19世紀初頭の英国では、対抗する勢力からはメソディストと福音派が同一視されたこと、国教会内部では福音主義が聖書を重視する「低教会派」(Low Church) と実質上、同じだったことが記されている。他方、「高教会派」(High Church) は、伝統的教義を重視し聖職者による儀式の意義を高く評価し、後述の「オックスフォード運動」の背景となった。このほかに、「広教会派」(Broad Church) は多様な立場を許容し寛容な精神を説き、自然科学も重視した。松永俊男『ダーウィンの時代—科学と宗教』名古屋大学出版会、1996年、154–157頁を参照。

12. デイヴィッド・ヘンプトン「イギリスにおける工業化後の宗教生活　一八三〇〜一九一四年」戸渡文子訳、シェリダン・ギリー／ウィリアム・J. シールズ編『イギリス宗教史』389頁。

13. シェリダン・ギリー「一九世紀のイングランド教会」並河葉子訳、シェリダン・ギリー／ウィリアム・J. シールズ編『イギリス宗教史』360頁を参照。

立って、前年の1828年には地方自治体法（Corporation Act）と審査法（Test Act）が廃棄され、非国教徒が地方自治体の役職、その他の公職へ就任することが認められることになった。さらに英国政府により、イングランド国教会が担当してきた諸制度が世俗の制度に転換されていく（いわゆる「世俗化」の進展）。1836年には、出生・死亡・結婚の登記が国教会以外に役所でもできるようになった。[14]

政府主導の国教会に対する諸政策に対しては、オックスフォード大学教授キーブル（John Keble, 1792–1866）が1833年に「国家的背教」と題する批判的な説教を行ない、それを発端として、教会の自己改革と信仰の復興を進める運動、「オックスフォード運動」が始まった。これはローマ・カトリック教会とプロテスタント諸教会の中間の道を行く国教会の新たな意義づけの試みとして、大きな影響を与えた。しかし、主導的な役割を果たしたうちの一人で国教会の聖職者だったニューマン（John Henry Newman, 1801–1890）が1845年にカトリックに改宗し、分裂した。

19世紀のイングランドにおいて、カトリックは徐々に社会的な存在基盤を強めていった。ヴァチカンにおいては、1869年から70年にかけて第1ヴァチカン公会議が開かれ、近代主義に対峙する教会の立場を再提示し、とりわけ教皇無謬性の教義を定めた。こうしたカトリックの立場が反近代的であったのに対して、大陸から自由主義的な神学思想と、聖書の歴史批評的な解釈法が英国にも及んでいた。これはより大きく見ると、近代合理主義や近代科学と宗教との関係の問い直しという意味をもつ。端的に言えば、「科学と宗教」という問題であり、この大問題については以下で少し触れることにする。

ところで、1851年に国勢調査が実施された際に、宗教に関する調査も行なわれ、それに関して、浜林正夫がいくつかの数値を提示している。その調査の結果のうち「教派別推定純出席者数」によると、イングランドとウェールズを合わせた人口約1,798万人のうち40.3% (7,261,042人) が教会に出席し、国教会は総人口比21.0% (3,773,474人)、非国教徒17.5% (3,153,490人)、ローマ・カトリック1.7% (305,393人)、諸派0.2% (28,685人) となっている。非国教徒プロテスタント諸教派の出席者数の内訳は、メソディスト1,566,107人、独立派（国教会からの分離派でピューリタン革命の中核を担った。のちの会衆派）793,142人、バプティスト587,978人、長老派（カルヴァン派で長老主義をとる。1560年以降スコットランドの国教会）60,131人、その他のプロテスタント諸派146,132人である。さらに最後に挙げた諸派の内訳の上位3派はユニテリアン（三位一体を否定し、神のみの神性を主張）37,156人、フレンズ協会18,172人、ブレザレン（Brethrenには諸派があるが、1820年代のダブリンで起こった福音派のプリマス・ブレザレンか）10,414人となっている。なおそのほかに1830年に米国で創設され、37年から英国伝道を開始したモルモン教の18,800人も挙げられている。[15]

なおこの統計実施の年よりあとに始まった宗教団体として著名なものに、救世軍 (Salvation Army) がある。メソディスト派の牧師ウィリアム・ブース (William Booth, 1829–1912) が1865年にロンドンの貧困地区で開始した伝道活動から始まり、メソディ

14. 塚田理『イングランドの宗教—アングリカニズムの歴史とその特質』教文館、2006年、250頁を参照。

15. 浜林正夫『イギリス宗教史』223、225頁を参照。

スト教会を離れ、独自の厳格な規律を有する軍隊的組織を設立し、伝道と社会奉仕活動に取り組んでいる。

海外伝道のための団体としては、すでに1698年にキリスト教知識普及協会 (The Society for Promoting Christian Knowledge, SPCK)、[16] 1701年には福音伝播協会 (The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, SPG) が設立されていた。18世紀後半には、James Cook (1728–1779) の3度の太平洋航海が行なわれ、南太平洋への人々の関心を高めていた。

その後、1799年には福音主義的な伝道方針を明確にした、教会伝道協会 (The Church Missionary Society, CMS) の前身のアフリカ・東洋伝道協会 (The Society for Missions to Africa and the East) が創設された。[17] また1795に設立された（主として会衆派からなる）ロンドン伝道協会 (The London Missionary Society) は宣教師・探検家のリヴィングストン (David Livingston, 1813–1873) のアフリカ探検を後援した。この人物の影響を受けて、1857年には国教会系の中央アフリカ大学ミッション (The Universities' Mission to Central Africa, UMCA) も設立された。また1804年には超教派団体として英国外国聖書協会 (The British and Foreign Bible Society, BFBS) も設立された。海外伝道の規模について、ピーター・ウィリアムズは次のような数値を挙げている。

> 一七八九年から一八五八年までに、五五九名の宣教師が一三のプロテスタント系伝道協会からインドに派遣され活動していた。シエラレオネは、アフリカにおけるCMS最大の伝道地域であり、一八五〇年代にはおよそ二〇名の宣教師がいた。一八六〇年には、インドにおよそ一一万二〇〇〇人、アフリカにおよそ二五万人のキリスト教徒がいたと推定されている。[18]

またウィリアムズは海外伝道が、プロテスタント諸教派間の協力を促進し超教派活動を刺激したことにも注目している。異なるプロテスタント伝道協会のあいだでの相互理解も進み、非キリスト教地域における活動のなかで、教派や教義の違いを超えた協力体制が生まれた。多くの「友好協定」が結ばれ、複数の伝道協会が同時に活動する場を統制した。地域、国、国際という各レベルで定期的に会合をもつ重要性についての認識が高まった。最初の本格的な国際会議は1860年にリヴァプールで開かれ、こうした流れは、広く知られている1910年のエディンバラの世界宣教会議に結実した。[19]

なお、米国ではイングランド国教会の伝統を受けた諸教会（アングリカン、聖公会）が、1785年に「アメリカ合衆国プロテスタント監督教会」(The Protestant Episcopal Church of the United States of America) を設立し、独立した国民教会となった。

以上、国教会以外の教団・教派の展開、福音主義、オックスフォード運動、海外伝道などが、19世紀英国の宗教史において重要な主題となっていることがわかる。ただし、こうした教団・教派史の外にも、次に見るように重要な主題がある。

自然神学から近代科学へ

「科学と宗教」という問題設定について一

16. 塚田理『イングランドの宗教』363頁を参照。
17. 同書272頁を参照。
18. ピーター・ウィリアムズ「イギリスの宗教と世界―ミッションと帝国　一八〇〇～一九四〇年」並河葉子訳、シェリダン・ギリー／ウィリアム・J. シールズ編『イギリス宗教史』476頁。
19. 同書490–491頁を参照。

言しておいたが、松永俊男によると19世紀英国におけるその問題は、自然神学から科学と宗教の分岐という過程をたどった。自然神学とは、神の啓示を重視する啓示神学に対して人間理性に基づく神学である一方、自然界の探究に基づく神学を指すこともあるという。[20] 松永は1859年刊行のダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809–1882) の『種の起源』も、自然神学の伝統から生まれたものだと記している。[21]

ここで松永の著書『ダーウィンの時代—科学と宗教』の全体をたどることはしないが、19世紀英国史との関係で、いくつかの要点だけをまとめておく。同書ではまず19世紀英国における地質学の発展について、詳しく論じられている。[22] 19世紀初頭、国教会の聖職者でもあるバックランド (William Buckland, 1784–1856) が同国において地質学を確立させたとされる。バックランドは聖書の記述を重視する聖書地質学を脱していくが、それでも大洪水を洞窟化石の分析を通じて実証しようとするといった点で自然神学の枠内には位置していた。[23] 彼の1823年の著書『大洪水の遺物 *Reliquiæ Diluvianæ, or, Observations on the Organic Remains attesting the Action of a Universal Deluge*』は地質時代を、「大洪水の前 antediluvial」「大洪水の時期 diluvial」「大洪水の後 alluvial」と分類しているが、「洪積世 Diluvium」、「沖積世 Alluvium」という用語は今日でも目にすることがある。松永は地質学の発展と、地球上での生物種の交替に関する見解との関係について、次のようにまとめている。

> 地質の変化の研究が積み重なるにつれ、地球には方向性をもった歴史があるという認識が広まっていった。地球上ではかなりの長期間、安定した状態が持続してその時期に特有の生物が繁栄するが、急激な異変が起きて多くの生物が絶滅し、その後に新たな生物が創造されて次の時代に繁栄する。これが繰り返されてしだいに高度な生物が登場し、最後に人類が誕生したと考えられるようになった。一八三〇年ころまでに、こうした見解がイギリス内外の大多数の地質学者の共通の認識になっていた。方向性をもたらす原因としては、地球が高温の状態からしだいに冷えてきたという説が広く受け入れられていた。[24]

ところで神学の影響下にあった当時の地質学にとっては、「ノアの洪水」のみならず、「創世記」1章における創造説をどう捉えるかも課題だった。それに関してバックランドらは「初めに、神は天地を創造された」（新共同訳）以降、6日間の創造の業とのあいだに多くの時間的な隔たりがあると解釈したという。[25] さまざまな学者たちの

20. 松永俊男『ダーウィンの時代』23頁を参照。

21. 同書 i–ii 頁を参照。

22. 近代の産業化と地質学の展開の関わりについて、モンゴメリーが以下のような指摘をしている。「地域の地質の理解を深める原動力となったのは、科学的な好奇心と宗教的信念だけではなかった。鉄や石炭の需要が鉱業や鉱物学の発展を促したように、鉄道や運河の建設が地域の地質を理解する必要性を高めたのだ。産業化が進んだ地域の学校では、地質学の必要性と実用性が増すにつれて、地質学の講座が設けられるようになった。岩石の研究は、時間と財力に任せて自然の仕組みを解き明かしたいと思う者の単なる知的趣味ではなく、生計を立てる手段となったのだ。」デイヴィッド·R. モンゴメリー『岩は嘘をつかない—地質学が読み解くノアの洪水と地球の歴史』黒沢令子訳、白揚社、2015年、142頁。

23. 同書 72–75 頁を参照。

24. 同書 77 頁。

25. 同書 78 頁を参照。そのほかに創造の6日のそれぞれの1日が24時間ではない、長期間を意味し

活躍により（基本的には自然神学の枠内で）歴史地質学が発展していくが、これに対して聖書地質学からは反撃が加えられていた。また1830年代のオックスフォード運動においては、高教会派は自然神学を認めないか、あるいは批判していたという。[26]

なおノアの洪水のような地球規模での洪水が起こったという説は、やがて否定されていくが、それでも太古の洪水伝説は、19世紀後半に新たに主張されるようになる。英国の考古学調査隊によって、古代アッシリアの首都ニネヴェの遺跡から発掘された紀元前7世紀の粘土板が1849年から54年にかけて大英博物館に持ち込まれると、学芸員助手のジョージ・スミス (George Smith, 1840–1876) により1872年に解読され、そこに洪水伝承が含まれていることがわかった。その後の発掘調査により他の粘土板も発掘され、さまざまな版の洪水伝承が知られるようになった。これがのちに「ギルガメシュ叙事詩」として知られるようになる物語である。このメソポタミアの洪水伝承が、やがてヘブライ語聖書において「ノアの洪水」として取り入れられたと捉えられるようになる。その後、メソポタミアにおける洪水の跡を示す証拠を求めて、考古学的発掘調査が行なわれるようになっていった。[27]

このように19世紀後半の自然神学においては、地質学が重要な役割を果たす。ところで将来、牧師になることを目指していたダーウィンは博物学にも興味を抱き、学生時代に地質学的調査などを行なっていた。その後、ケンブリッジ大学を1831年に卒業してから、英国海軍の調査船ビーグル号に乗船し、1831年から36年にかけて世界一周の航海に出かけたことが大きな転機となる。1859年の『種の起源』も自然神学の書物として刊行されるが、やがてダーウィンはキリスト教信仰を失っていった。信仰喪失がいつだったのか特定できないが、松永俊男は以下のように記している。

> ダーウィンは、遅くとも一八六〇年代後半にはキリスト教信仰を棄て、自然選択は神と無関係で無目的な自然現象とみなすようになっていた。こうして、ようやく、生物学はキリスト教と切り離されたのである。ダーウィンの進化論は、自然神学としての生物学から、近代生物学への曲がり角に位置していた。[28]

松永によると『種の起源』は刊行直後には肯定的な評価を得られなかったが、10年後までにはイギリスの科学界で生物の進化は常識となっていたという。やがて科学界から一般社会へと、進化論は徐々に浸透していった。[29] 自然神学からの科学と宗教の分離も進行していく。この分離の背景には、オックスフォード、ケンブリッジ両大学の改革（非国教徒への開放という意味での世俗化）、学問諸分野の専門分化がある。科学の週刊誌 *Nature* も1869年に創刊された。科学はキリスト教を後ろ盾とする必要はなくなり、宗教から自立した独自の存在になり、やがて専門職業化していく。[30] タイラーが人類学を樹立していくのは、こうした近代科学の勃興期だった。

英国において、こうした学問分野の動向は国教会を中心とするキリスト教を抜きにして考えることはできない。しかしながら

ているという解釈もあったという。同書99頁を参照。

26. 同書 203–206 頁を参照。

27. モンゴメリー『岩は嘘をつかない』「8　粘土板の断片に記された洪水伝承」を参照。

28. 松永俊男『ダーウィンの時代』340 頁。

29. 同書 353–354 頁を参照。

30. 同書 358–367 頁を参照。

19 世紀の英国においては、次に見るようにキリスト教以外にも重要な新たな現象が生じていた。

「心霊」の時代

19 世紀英国の思想潮流として、キリスト教史のみを振り返るのでは十分ではない。『原始文化』を読むうえで、同書中でしばしば言及されている近代心霊主義について、ごく簡単に回顧しておく必要があろう。タイラーが「アニミズム」という用語を用いるのは、心霊主義（spiritualism）と区別するためという意図もあったことを考えると、その対比の対象について概観しておくのは無駄ではない。[31]

1848 年に米国ニューヨーク州ハイズヴィルにおいて、フォックス家に起こった心霊現象から近代心霊主義が展開していったことはよく知られている。心霊主義の具体的な流行は、一つには霊媒を中心とする交霊会（降霊会という表記もある）の開催という形で現われ、そこにおいて死者霊との交信が実現し、それに付随する物理的諸現象が発生するということになっている。米国からヨーロッパへの心霊主義の広がりを、大野英士は心霊術という用語を用いて次のようにまとめている。

> 心霊術の流行は一八五二年から五三年にかけて大西洋を渡ってイギリス、フランスに飛び火し、王宮や政界の大立者、社交界の有名人、作家、科学者、市井の名も知れぬ人びと、数百万人が、降霊円卓＝ターニング・テーブルの周りに集まり、交霊会（セアンス・仏／セイアーンス・英）に勤しんでいたことは余り知られてはいない。[32]

31. タイラー『原始文化』〈上〉520 頁を参照。

32. 大野英士『オカルティズム―非理性のヨーロッパ』講談社選書メチエ、2018 年、185 頁。

死別の悲嘆から、死者への哀悼・追悼、さらに死者との交感に向かっていく人間の態度は取り立てて異常なものではなく、むしろ人々の宗教生活の重要な一部を占めるものとも捉えられよう。これが死者の霊との具体的な交流を含む心霊主義として興隆していくことになった背景については、吉村正和が次のように記している。

> 心霊主義は、親しい身内の死による悲哀と自分自身の死への不安という根本的な悩みに答えるという目的をもっていた。地上における生が死をもって断絶することへの不安こそ、数々の不正行為にもかかわらず心霊主義が存続することができた理由である。本来このような恐怖や不安に答える立場にあった教会や聖職者は、一八世紀の啓蒙主義以降は徐々に権威を失って退潮傾向にあり、人々は古い神話ではなく新しい神話を必要としていたのである。[33]

また心霊主義の勃興した時代は、産業化、文明化、機械化の進展のなかで物質文化が大きく発展していく時代でもあった。前述していない新たな発明としては電気通信があり、モールス信号で知られる米国人モース (Samuel Finley Breese Morse, 1791–1872) の 1837 年の実験から電信技術の実用化が始まり、44 年にはワシントン－ボルティモア間約 60km に電信回線が敷設、50 年にドーバー海峡の海底ケーブル、66 年に大西洋の海底ケーブルが敷設された。吉村によると「心霊主義における死者の霊との交信というテーマは、通信手段の発達が背景にあったことは間違いがない」とされ、「死者の霊との交信という発想は、地上に限定された電信という技術をもう一歩進めて精神世界に応

33. 吉村正和『心霊の文化史―スピリチュアルな英国近代』河出書房新社、2010 年、22 頁。

用したものである」と言われる。[34] こうして見ると、伝統的な宗教が退潮する一方、新たなテレコミュニケーション技術が発明、応用されるようになる時代に、心霊主義が登場したことになる。

またオッペンハイムによると、心霊術の流行の背景には、「19 世紀前半の英国における奇術ショーの成功」があったという。彼女によると、中世から 17 世紀まで、奇術師 (conjurer) は奇術のみならず霊を呼び出す (conjure up) といった超自然的な能力をもつと見なされていた。これが超自然的な霊的能力とは関係のない手品の見世物という娯楽と、霊媒の能力とにいわば分化していったのが 19 世紀後半だったと、オッペンハイムは見通しを立てている。そうした前史を受けて、霊媒のなかに奇術師・手品師やさらには悪名高いペテン師も紛れ込んでいたようだ。また練達の奇術師が、霊媒のペテンを暴露する――それによってみずからの神業ぶりを誇る――ということもあった。[35]

伝統宗教の退潮の時代、また近代科学技術の時代に登場した心霊主義は、それなりの科学性をまとってもいた。英国の心霊主義者たちは、近代科学が揺るがした伝統宗教に基づく世界観・宇宙観・人間観を前提としながら、心霊現象は物理科学の経験的検証に耐えるものと考えられていた。オッペンハイムは次のように記している。

> 英国の心霊主義者は、心霊主義をもってすれば建設的な科学的方法論が、人類存在の哲学的・宗教的意味の探究に利用できるのではないか、そうすれば科学の破壊的インパクトが相殺されるのではないかという希望を持っていた。心霊現象が科学的に証明されれば、科学は信仰への挑戦者から、再び信仰の擁護者に戻るだろう。霊媒が実験室で研究されれば、その結果は化学者のフラスコに見いだされる発見と同じくらい決定的なものになるだろう。このように死者との交信が立証されれば、人間の不死性は単なる形而上的憧れではなくなり、科学的事実という地位を獲得するはずだ。心霊主義が宗教になりかわって心の安らぎを提供できるという主張の当否は、それがどれだけ科学の装いを身に着けられるかにかかっていた。[36]

もっとも、実際には心霊主義者たちは厳密な科学者ではなかったし、こうした主張は専門的、職業的になりつつあった当の科学者たちからはほとんど支持されなかった。しかしながらそれでも、心霊主義に接近した科学者もおり、心霊主義と科学とは単純な図式に収めるのはそれほど容易ではない。[37] この点で、オッペンハイムが一人の科学者、ウォレス (Alfred Russel Wallace, 1823–1913) について詳しく論じているのは興味を引く。ダーウィンが 1859 年に『種の起源』を刊行すると、進化論は 19 世紀後半の大きな思想潮流になっていき、キリスト教やその他の宗教も、またさまざまな思想哲学も、さらに心霊主義も進化論の衝撃を受け止める必要に迫られた。ダーウィンと研究仲間だった博物学者ウォレスはみずからも進化論者だが、1865 年に交霊会に参加し始め、やがて科学よりも心霊主義に心酔し、その後も擁護し続けていたのである。[38]

心霊主義の背景、あるいはその周辺には、骨相学 phrenology、催眠術 hypnotism、メス

34. 同書 26–27 頁。

35. ジャネット・オッペンハイム『英国心霊主義の抬頭―ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』和田芳久訳、工作舎、1992 年、42–47 頁。

36. 同書 261 頁。

37. 同書 263–264 頁を参照。

38. 同書 375–409 頁を参照。

メリズム mesmerism、神智学 theosophy、代替医療 alternative medicine といった諸現象がある。これらについてはそれぞれまた別にさまざまな研究の蓄積があるが、ここで論じることは省く。また 1882 年に英国で心霊研究協会 (The Society for Psychical Research) が創設されると、心霊主義は、心霊科学、あるいは超心理学 parapsychology の研究対象となっていくが、それについてもここでは追わない。[39] そうした重層的な歴史研究は端折ったうえで本稿が試みたかったのは、キリスト教史を振り返るだけでは見えてこないまた別の現象の展開があったことを振り返ることである。タイラー『原始文化』は、英国の植民地経営やそれに付随する海外伝道、さらには近代の地質学や進化論の展開などとともに、心霊主義の興隆も一つの背景としていたのだった。『原始文化』は、帝国主義、植民地主義のみならず、心霊主義も含んだ時代背景のなかに位置づけられる作品なのである。

最近の学説史研究

最後に近年の学説史研究のなかから 2 点を取り上げて、そこで論じられるタイラーの位置づけをたどっておこう。

Wheeler-Barclay, The Science of Religion in Britain, 1860–1915 (2010)

歴史学者 Marjorie Wheeler-Barclay による *The Science of Religion in Britain, 1860–1915* (University of Virginia Press, 2010) は、マックス・ミュラー、アンドリュー・ラング、ウィリアム・ロバートソン・スミス、ジェイムズ・G. フレイザー、ジェイン・エレン・ハリソンとともに、タイラーを取り上げた英国宗教学成立史研究である。

英国における宗教学への一般的な関心は、19 世紀後半における二つの寄附講演の設立に表われている。すなわち 1878 年設立の Hibbert Lectures on the Origin and Growth of Religion と 1887 年設立の Gifford Lectures on Natural Theology である。[40] 大学制度内においては、1876 年に非国教会系のマンチェスター・カレッジで比較宗教の講座が、またオックスフォードに 1886 年に開設されたマンスフィールド・カレッジでも比較宗教の講義が設けられた。[41]

宗教学のこうした制度的成立に先立って、ウィーラー・バークレイが論じる宗教学前史にあたる時代には、ダーウィンが 1859 年に『種の起源』の刊行に端を発する進化論の衝撃があった。これにより聖書や神学の正当性には疑問が付され、科学と宗教とのあいだの対立や両立が問題となってきていた。他方、すでに蓄積されてきていた非西洋の「宗教」的諸現象の捉え方も問われてくる。彼女は、ダーウィニズムの影響を受けた社会進化論と英国植民地の拡大のなかで、見たところいわゆる「野蛮」な非西洋人についての進化論的な位置づけが、当時の初期人類学にとって課題となることを指摘している。「未開」から近代西洋へ、という（想定上の）進化の過程と並行して、宗教の起源や、呪術と宗教の関係という問題も浮上し、これらが初期の宗教学にとって

39. 大野英士『オカルティズム』、「第九章　科学の時代のオカルティズム―心霊術と心霊科学」を参照。なお、心霊研究協会はロンドンに現存する (https://www.spr.ac.uk/)。

40. タイラーは 1889 年 12 月よりギフォード講演を行なった。Larson, p. 28 を参照。

41. Marjorie Wheeler-Barclay, *The Science of Religion in Britain, 1860–1915* (University of Virginia Press, 2010), p. 18 を参照。

主題となっていく。また西洋文明の起源と位置づけられたギリシア・ローマ古典古代の異教についても、粗野な未開の宗教としての理解が進んでいく。

ウィーラー・バークレイはヒューム、ド・ブロス、コント、スペンサーを宗教学の前史のなかで概観し、続いてマックス・ミュラーについて1章を割いたあとで、タイラーを論じる章を設けている。彼女は1871年にタイラー『原始文化』が刊行されたことを、『種の起源』刊行後10年ほどのあいだに展開されてきた宗教と科学との論争のなかに位置づける。当時の科学は自然科学のみならず、新たに生み出されつつあった社会学、心理学、人類学などを含む人文社会系諸学も、それぞれ専門分野として、専門家の科学者集団の組織化と学術誌の刊行を通じて確立されつつあった。また英国においては上述のとおり、当時、大学改革が進められており、1871年の大学審査法によりオックスフォード、ケンブリッジ両大学が国教徒以外にも開放された。神学も諸学の上位を占めていたかつての位置を失い、他の学問分野と同様に並置される一分野となった。[42]

タイラー『原始文化』をめぐるウィーラー・バークレイの議論のなかで、ここでは進化論的な宗教理解におけるアニミズムについての論点を要約しておこう。ウィーラー・バークレイによると、タイラーにとって宗教の最小限の定義であるアニミズムは人類の宗教哲学の基底であって、いわゆる多神教や一神教の土台にもアニミズムがあるという。アニミズムは多神教や一神教と排他的に存在するのではなく、霊的存在についての教理であることから、より高位にあると捉えられる神的存在についても、またその他の霊的存在についても、アニミズムとして捉えられる。[43] アニミズムはまた「魂の理論」を含み、これは宗教哲学の体系の基本的な部分の一つとして、野蛮なフェティシズムから文明化したキリスト教までも結びつけるものと捉えられている。現代世界における宗教の差異や対立は表面的なものであって、最も根深い分裂は、アニミズムと物質主義（唯物論）のあいだにあると見られている。[44]

ウィーラー・バークレイの見るところタイラーの学問は、次の引用に示されるようにヴィクトリア時代の宗教的危機や文化的動揺のなかに位置づけられるものである。

> 彼の最も重要な作品『原始文化』の根底にあるメッセージは、宗教の連続する諸相を生み出してきたのと同じ進化の過程が、すべての有神論信仰の基盤を徐々に衰退させているということだった。神学の源泉を未開人の精神による最初期の思弁的模索に位置づけることで、タイラーは進歩への信仰にとってきわめて重要な人間の本性についての楽観的評価は損なうことなく、この偉大な幻想の起源を説明しようとしたのである。[45]

彼女はタイラーのメッセージは、宗教も進化の過程で重要な位置を占めることを認めるという点で、最終的には肯定的なものだという。

> 新たな世俗的人間は自分を取り巻く歴史から切り離されているのではなく、祖先たちに従い続けていた。世俗的人間が通る道は、アニミズムが発展する際に通ってきた連続する諸相によって、ならされてきた道であ

42. Ibid., p. 80 を参照。

43. Ibid., pp. 91–92. またタイラー『原始文化』〈上巻〉520–521 頁を参照。

44. Ibid., p. 94. また『原始文化』〈上巻〉594 頁を参照。

45. Ibid., p. 249.

り、キリスト教はこの歴史的諸形態のなかの最高の洗練の極みだったことを、一種の墓碑銘として主張することができよう。[46]

ウィーラー・バークレイはヴィクトリア時代の社会と、そこで興隆しつつあった人文社会系の学問の動向のなかに、タイラーの『原始文化』を位置づけようとしている。それに対して、より焦点を絞って、ヴィクトリア時代における人類学の誕生のなかにタイラーを位置づける研究も蓄積されてきている。ここではその一例として、さらに近年の学説史研究について振り返っておこう。

Lecourt, Cultivating Belief (2018)

英文学を専門とする Sebastian Lecourt の *Cultivating Belief: Victorian Anthropology, Liberal Aesthetics, & the Secular Imagination* (Oxford University Press, 2018) はヴィクトリア時代を宗教が衰退していく世俗化の時代と捉える見方に対して、以下のように視点の転換を提起している。

> 産業主義、都市化、ダーウィニズムの力が重なり合った時代としてのヴィクトリア時代は、近代における宗教の衰退という語り口のなかで長く中心的な位置を占めてきた。しかし私が論じるのは、実際には、ますます広汎な領域にわたる著述家たちが、国内における諸教派間の論争、国外植民地における現地人との遭遇という二重の圧力に対応して、宗教の本性と、世界における宗教の機能を定義するのに没頭するようになった時代として理解するのが、よりいっそうわかりやすいということである。[47]

レコートによると、近代西洋において宗教は内面の信仰にかかわる事柄だという捉え方が広がっていくが、1860 年代の英国では宗教は人種や民族としてのアイデンティティーとかかわる概念となり、継承されてきた伝統に組み込まれたものと捉えられるようになってきたという。[48] こうしてヴィクトリア時代には、宗教の性質や役割が多くの論者によって多角的に検討されるようになってくるが、新しく登場してくる人類学もまた、そのような宗教に関する議論の一つとしての位置を占める。[49]

タイラーが学祖と目される人類学の誕生の背景には、そもそもその学問の対象である「人類」をめぐる二つの捉え方があったという。レコートはその両論、単一発生論 (monogenesis)、多発生論 (polygenesis) を以下のようにまとめている。

> この議論の一方には単一発生論者として知られる一団があり、彼らは奴隷廃止運動とも、多様な伝道団体とも結びつき、人類学という新興の道具を用いて、すべての人類は共通の起源と道徳的な地位を共有するという考えを守ろうとしていた。他方、多発生説学派は、アフリカ人、ヨーロッパ人、ポリネシア人は皆、別の種を表わし、それゆえ西洋の自由主義とキリスト教の価値観を、同様に引き受けることはできないと主張した。政治的には、単一発生論と多発生論のあいだの論争は、グレートブリテンがどのように植民地の諸民族を遇すべきかに関連していた。[50]

帝国の植民地経営と人類学的人間理解とは、このように密接に連関していた。こう

46. Ibid.

47. Sebastian Lecourt, *Cultivating Belief: Victorian Anthropology, Liberal Aesthetics, & the Secular Imagination* (Oxford University Press, 2018), p. 2.

48. Ibid.

49. Ibid., p. 27 を参照。

50. Ibid., p. 33.

した人間理解の分岐を反映して、単一発生論者は、宗教は「自己の陶冶を可能にする霊的内面性を育む内的可能性」と捉える。それに対して多発生論者は宗教を、「多様な民族を分ける具体的な深部からの差異についての付随物」としか見ない。[51] 前者の立場からは植民地経営においても現地住民の人格的陶冶の可能性が含まれるが、後者の立場に立つ場合にはより過酷な帝国主義的な植民地経営に結びつくことになろう。

こうした異なる人間理解は、草創期の人類学者たちの人種や宗教の理解にも影響を及ぼした。1860 年代には進化論、社会進化論も人類学に影響を及ぼすようになっていた。タイラーの考えは、単一発生論的な進化論と見ることができよう。レコートはタイラーの人間理解と宗教論を次のようにまとめている。

> それはすべての人類が単一の本性を分かちもつことを思い描くが、その本性を文明の異なる層のなかで多少とも発展したものと捉えた。この点でタイラーはまた世俗化の異なる物語を提供することになった。宗教を文化に先立って、人間の平等を保証するものとして位置づけるのではなく、人間が何世紀にもわたって育んできた「知識、信念、芸術、道徳、法、慣習」といったより広い歴史のなかに宗教を同化したのである。[52]

結局のところ、ウィーラー・バークレイもレコートも、タイラーの人類学はヴィクトリア時代の世俗化の一事例として位置づけている。しかしながらヴィクトリア時代それ自体は、イングランド国教会の位置は揺らいでいくとはいえ、全般的な世俗化の時代と捉えるには注意が必要だろう。本稿は、タイラー『原始文化』を読むうえでの背景的な状況を提示することだけを目的としているが、それでもその背景が複雑な宗教史を呈することもかいま見てきたことになる。

まとめ

ここまでタイラーの学問の背景をめぐって、19 世紀英国史の概観から、宗教史の動向、自然神学と科学、心霊主義の動向などを振り返り、次いで学説史研究のうちの 2 点についても触れてきた。この概観は既存の研究から目についたものを追っただけのものであるので、さらに個々の主題についても深く検討する必要もあるだろうし、ここで触れていない重要な論点もまだまだあることだろう。そうした点を指摘したうえで、さらに 1 点、手短に追加しておきたい。

タイラーの『原始文化』はそれ自体、人類学、宗教学の歴史を考えるうえで重要な書物だが、さらに今日、「アニミズム」という概念を再考するうえでも再読が必要になっている。アニミズム概念も学説史研究において、重要な論点を提示しているが、[53] それのみならず日本においてはまた独自の意義を有する。というのもこの概念は、宗教研究の枠組みを超えて、日本文化にかかわるいくつかの分野においても、重要な概念装置として利用されることがあるからである。

たとえば、美術史家の辻惟雄氏は近年の若冲ブームを引き起こした立役者として知られるが、日本美術史のなかにアニミズム

51. Ibid., p. 34.

52. Ibid., pp. 63–64.

53. たとえば、岩田慶治のアニミズム論を再検討した鈴木正崇「アニミズムの地平—岩田慶治の方法を越えて」（鈴木正崇編『森羅万象のささやき—民俗宗教研究の諸相』風響社、2015 年）を参照。

の視点を導入してもいる。[54] あるいはまた、環境考古学・環境文明論を提唱してきた安田喜憲氏も、長くアニミズムの復権を主張している。[55] さらには両者とも、なんらかの形で梅原猛氏と接点があったということも興味深い。

こうした関連する他領域における研究にあわせ、また最近、英語圏においても活発に論じられているように見受けられる日本のアニミズムという論点を再考していくうえでも、[56] 改めてタイラー『原始文化』の今日の視点からの再読が求められていると言えよう。

おくやま・みちあき
南山宗教文化研究所第一種研究所員

54. たとえば、辻惟雄『あそぶ神仏―江戸の宗教美術とアニミズム』（初出 2000 年、ちくま学芸文庫、2015 年）を参照。

55. たとえば、安田喜憲『環境文明論―新たな世界史像』（論創社、2016 年）を参照。

56. たとえば、Shoko Yoneyama, *Animism in Contemporary Japan: Voices for the Anthropocene from Post-Fukushima Japan* (Routledge, 2019); Fabio Rambelli, ed., *Spirits and Animism in Contemporary Japan: The Invisible Empire* (Bloomsbury, 2019) を参照。